

誰もが予想していなかった新型コロナウイルス感染症という敵との戦いが続いています。社会全体が混乱に陥る中、通常とは違った形とはいえ秋季シーズンの開催ができるまでごぎつねることができました。ウイルスという見えない敵に身を挺して立ち向かい、今も戦いを続けている全国の医療関係者の皆様に、日本のアメリカンフットボール界を代表してあらためて感謝の意を表したいと思います。

同時に、誰もが経験したことがない状況の中で、競技再開に向けて力を尽くしているJAF A所属団体の皆様にお礼申し上げます。

競技再開に尽力した フットボールドクターと 医療関係者の皆様に感謝

選手とご家族の安全を守り、感染拡大防止という社会的責任を果たしながら、いかに競技を再開していくか。JAF Aでは緊急事態宣言が解除された後、スポーツ庁および日本スポーツ協会が示した新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドラインに競技特性を加味した、競技再開に向けたガイドラインを策定し発表しました。

シーズン開幕特別インタビュー

時代の変化に対応する 『アジャスト力』がキーワード

公益社団法人日本アメリカンフットボール協会 会長

国吉 誠

感染症のリスクがある状況下で、コンタクトスポーツであるアメリカンフットボールを再開するためには、いかに安全性を担保していくかという明確なガイドラインの構築が必要不可欠でした。実際、再開のフェーズにおいてチームが所属する企業や学校などの団体から安全対策案の提出を求められた際に、基準となるJAF Aのガイドラインが役に立ったという報告をいただいています。また、『フットボールは対応がしっかりしている』という他競技関係者からの声も届いています。

迅速かつ、明確な準備ができたのは、スポーツドクターとして日本の第一人者である川原貴ドクター（JAF A理事／UNIVAS副会長・安全安心委員長）をはじめ、医療とアメリカンフットボールの両方に高度な専門知識を持っているドクターの皆さんが、有機的に取り組んでくださったからこそ実現できたことです。

加えて、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会から、ワールドラグビー（ラグビー国際競技連盟）が策定したプロトコルの資料をご提供いただきました。競技の枠を越えたご協力にお礼申し上げます。

その他にも競技再開に向けて様々な課題をクリアするために、たくさんの方々尽力をしてくださりました。フットボールはチームスポーツの中でも最大の人員を擁するスポーツです。感染予防の側面から見れば、その分クリアしなければならない課題が多くなります。しかし、多くの人々が関わるスポーツであるからこそ、それぞれが専門知識を持ち寄って、この難極に立ち向かうことができていると実感しています。

緊急事態宣言が新入生獲得の時期と重なってしまったため、多くのチームが新人獲得に苦戦をしている状況も伝わってきています。影響は今年だけでなく、数年にわたることを覚悟しなければならないでしょう。

今、私達にできることは、競技を安全に行う対策を万全にし、世の中からの信頼を勝ち取っていくことです。その積み重ねが、最終的に競技人口の回復につながると信じています。

2028年ロス五輪の フラッグフット採用への期待と 広がる国際交流

本年度よりJAF Aは公益財団法人日本フラッグフットボール協会（JFFO＝岡出美則・代表理事）と共同で、『FLAG FOOTBALL PROJECT2028』と銘打ち、フラッグフットボールの普及と競技会の開催を共に行っていくことになりました。

これは2028年に開催される予定のロサンゼルス五輪でフラッグフットボールを追加競技にしようとするIFAF（国際フットボール連盟）とUSAフットボールの動向を受けた取り組みです。2022年にアラバマで開催されるワールドゲームズ（※）にフラッグフットボールが採用されたことは、ロス五輪での追加競技採用に向けた大きな一歩と期待を膨らませています。

JFFOは小中学校など、教育現場でのフラッグフットボール普及に取り組まれています。2017年には授業で採用できる競技として小学校体育の新学習指導要領本編にフラッグフットボールが明記され、本年

2020年度から施行されるという成果を残されています。JAF Aは競技会運営の部分で力を発揮することにより、お互いの得意分野を生かし、限られたリソースを最大限に活用して、競技の普及に取り組んでいく方針です。

今年1月にはインターナショナルボウルにおいて高校日本選抜がアンダー17米国代表を下し、3月には日本代表と米国プロフットボール予備軍のザ・スプリング・リーグ選抜との一戦が実現しました。さらに、12年ぶりに復活した米国カレッジオールスター戦のフラボウルに3名の日本人選手が招聘され、今季はシーズンがキャンセルになってしまいましたが、カナディアンフットボールのプロリーグであるCFLが日本人選手を国際選手枠で採用するためにトライアウトを実施するなど、競技レベルの向上を期待できる国際交流も進んでいます。

こうした動きは、必ずしも計画していたものではありません。しかし、現在の新型コロナウイルスがもたらした状況も含めて、予期していないことに柔軟に対応できるアジャスト力の発揮が、今のJAF Aにとっては一番重要だと私は考えています。

ライスボウル見直し ワーキンググループを設置

日本学生協会が甲子園ボウルを、日本社会人協会がジャパンエックスボウルを開催する意向を固めたのを受けて、JAF Aも来年1月3日に日本選手権第74回ライスボウルを実施する方向でコンセンサスを固めています。

第36回大会まで学生のオールスター戦だったライスボウルは、日本アメリカンフットボール50周年の1984年度、第37回大会より学生王者対社会人王者が対戦する日本選手権に衣替えをしました。今年1月3日の第73回大会は、日本選手権として37回目であり、学生オールスター戦として行われていた回数を越えた大会でした。

ライスボウルはJAF Aの事業として最も収益を上げているイベントであり、それが国際試合の際の日本代表、選抜チームを強化する費用の原資になっています。

一方で、近年は学生と社会人の実力格差が大きくなり、日本最高峰の試合として、広く一般にエキサイティングな内容をアピールするという点においては難しくなっているのも事実です。

そこで、時代に則した形にし、ライスボウルの価値をより高めるために、『ライスボウル見直しワーキンググループ』を設置して議論を開始しています。ワーキンググループには、運営側はもちろん、現場の代表として元日本代表ヘッドコーチの森清之氏（現・東京大学HC）にも参画していただき、日本最高峰の試合として、よりフットボールの魅力を広くアピールできる案を練り上げたいと考えています。

2020年シーズンは開幕後も状況により、中断をしなければならなくなるかもしれません。先のことは誰もわからない状況だからこそ、今やるべき目の前のことに集中し、一步一步、歩を進めていくことが、あらゆる状況に柔軟に対応することに繋がると考えています。

（※）『第2のオリンピック』と言われる国際総合競技大会。国際ワールドゲームズ協会（IWGA）が主催、国際オリンピック委員会（IOC）が後援し、4年に一度、夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の翌年に開催される。オリンピックに採用されていない競技が採用されているが、これまでワールドゲームズに採用された8競技が後にオリンピックに採用されている。来年開催予定の東京オリンピックで追加採用された5競技もすべてIWGA加盟競技である